

二つの対照的な施設を巡って

J
U
N

昨秋、平和学習の一環で都内にある資料館をガイドとして案内した。

一つは、靖国神社の中にある遊就館、もう一つは江東区にある東京大空襲・戦災資料センターである。初めは靖国神社からだった。今までも平和学習として何度か来た。九段下駅から続く上り坂を息を荒くしながら上りきつて鳥居の前で一休みする。ここは他の神社とは違い、いつ来ても空気が重く感じるの私だけなのだろうか。できることなら、今すぐにも引き返したい気持ちをグッと抑え、足に前へ出るように言い聞かせる。

銅像や碑一つひとつをこの神社が持つ意味と合わせ丁寧に説明しながら、ゆっくりと中に進むが、ガイドなのでそれ

なりに大きな声を出さなければ通じないため常に周りの目が気になる。「おい！お前ら！」ともしかしたら眼をつけられるのではないか、そんなある種の恐怖も持ちながら早くこの時間が過ぎないかともややもやした気持ちから胃が痛くなりそうだ。

参道に目をやると、多くの人が行き来をしている。誰か知っている人がここにいると信じているかのような年配の方、写真を撮りながら子どもとお散歩気分でズンズンと中へ進んでいく家族連れ、熱心(!?)な人と思われるカーキ色の服を着た男、そして一番多いのが大型の観光バスを降りて数珠繋ぎになつて並んでいる大手旅行会社が企画する観光バスツアーの団体だった。案内人の持つ小旗を先頭に、

ぞろぞろと本殿に向う光景はおそらく、今も昔も変わりなかつたのではないか。

遊就館は参道を途中で右に折れ、一番奥に建っている。説明しながら進むので、入り口からすでに三〇分以上が経つてようやくたどり着いた。中の展示物はどれを見ても「勇敢に戦った」のオンパレード。胸が詰まりそうだったが、この資料は何が言いたいのかをきちんと見極めるために、さらに二時間もの時間を掛けて展示館を隅から隅まで。最後は実物大の模型や遺品の展示で、特攻機や人間魚雷が堂々と展示されていた。

参道の入り口にたどり着いたときにはすでにぐったりであり、打ちのめされたという感じだった。これだけ宣伝されれば、「お国のために」頑張った人を祀るのは当然だろうと思わず頭に浮かんでしまう。

靖国神社を後にして、次に東京大空襲・戦災資料センターへ移動した。ここにも何度か来ているが先ほどとは変わり、辛い過去が展示されている場所なのだが、なぜか安心感がある。やさしそうな年配の女性が受付で出迎えてくれて、まずは真実を知ってほしいと数十年前に報道されたドキュメンタリー番組を鑑賞した。その中で夜中、無差別爆撃を受ける経過が語られる中、衝撃的なワンシーンがあった。それは、東

京空襲を考案し指揮したカーチスルメイが戦後、勲一等旭日大綬章をもらい、自宅に飾っているということである。理由は戦後、航空自衛隊を育てたという功績がたたえられたからだ。

この勲章に関しては、アメリカからも日本に勲章を贈っているのではないとも言われ、さまざまな憶測もとびかっているが、私でも分かる確かなことは、一九四五年三月一日に一〇万人以上の命を一晚にして奪った張本人に日本政府がわざわざ栄誉として称えたという事実であり、胸が締め付けられる。上映会が終わり館内展示を見ていると、隣で子どもが書いた手紙を読んで涙している若い女性がいた。手紙の内容は空襲で大変だったが、大した影響も無く元気に暮らしているという内容の手紙だった。協にあった解説文には、家も失ってしまい毎日が大変な生活だが、手紙一枚にも検閲がかかり、本当のことが書けないというものだった。この「本当」のことが言えず、明るく振舞っている様子を思い浮かべて、私たちが部屋を出るまでその女性はずっとその場から離れなかった。

遊就館のような、どの展示も派手に飾られ「軍隊は良くやった、お国のために頑張った」の大合唱とは違い、静まり返った館内に足音と女性の鼻をすする音だけが聞こえ、みんなその時の出来事一秒一秒を確かめるように、ガラスケース

を覗きこんでいる。アメリカの攻撃というよりも時の権力の犠牲になられた多くの方たちにあらためて「ご冥福を」という気持ちを伝え、資料館を後にした。

今年、戦後七〇年になりニュースや新聞でも取り上げられている。戦後五〇年・六〇年の時には生き証人のインタビューなども多くのメディアが行い、平和について投げかける番組や特集記事が多くあった。しかし、今年は節目とはいふものの今までのように大きく扱われることが少なくなつた。これも今の権力者の影響なのだろうか、沖縄県辺野古沖の埋め立てに向けた工事が急がれ、一方、イスラム国をめぐって緊張状態が高まつている。

日本は過去あれだけの犠牲を払って、二度と繰り返さないと誓い憲法をはじめあらゆるルールを作つて縛りを掛けてきた。しかし、二度と武力を持たない・行使しないと誓つたはずの約束が「解釈」によつて崩れ去ろうとしている。昨秋巡つた二つの施設のパンフレットをあらためて見つめ、もつともつと周りに気づかせようとなつた瞬間だつた。

